

生成AI時代の特許調査

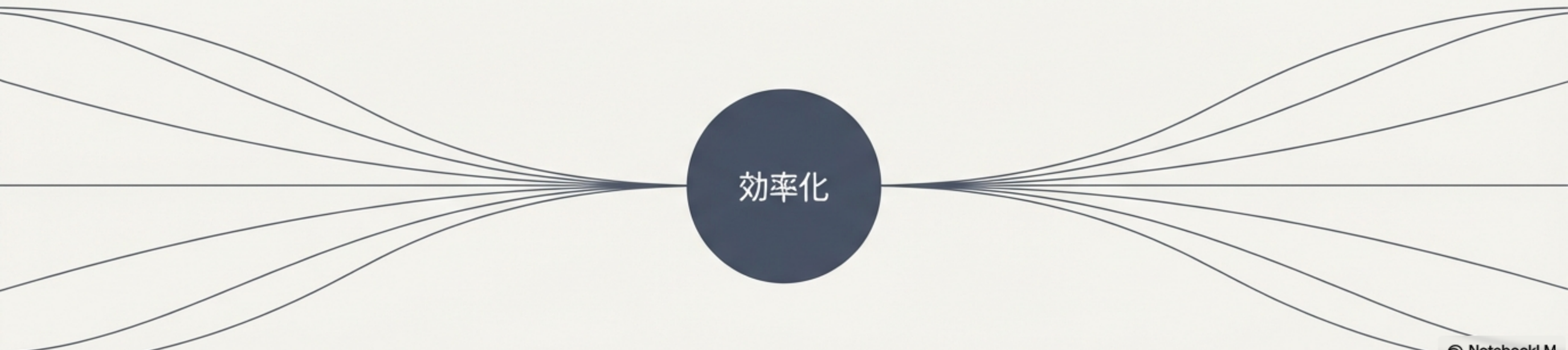
効率と非効率のあいだで、専門性を磨く

弁理士法人レクシード・テック パートナー弁理士 角淵 由英 氏

AI活用は、「効率化」のためだけか？

生成AIの登場により、私たちの業務は劇的に変化しつつあります。多くの議論が「いかに効率化するか」に集中しています。しかし、本当にそれが私たちの目指すべき唯一のゴールなのでしょうか。本資料では、AI時代における知財専門家の真の価値とは何かを、「効率」と「非効率」という二つの対立する概念から探求します。

「自分がやりたいのってなんかその仕事を効率的にこなすことだったのかなっていう風に思うと…」



効率化

第1部：効率性の追求 – AIがもたらす圧倒的な生産性



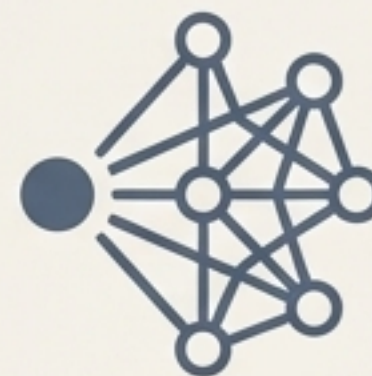
時間のかかる作業の自動化

数千件の文献スクリーニング、要約作成、メール返信、議事録作成など、これまで人間が行っていた定型業務をAIが肩代わりします。



品質の向上

膨大なデータに基づき、人間では見落としがちな視点を提供し、アウトプットの質を向上させる可能性があります。



アクセスの民主化

専門家でなくとも、高度な調査・分析が可能になり、知財活用の裾野を広げます。

我々は、これまで時間や労力の制約でできなかったことを、
AIによって実現できる時代にいます。

AI活用の3つの目的：我々プロフェッショナルが目指すべきはどこか？

1. 効率化 (Efficiency):
今までできたことを、より速く、より高品質に。

2. 裾野の拡大 (Democratization):
今までできなかった人が、できるようになる。

3. 専門性の深化 (Specialization):
プロが、さらに高みへ。これまで人間の能力の
限界で到達できなかった領域へ。

本資料で最も重視するのは、3つ目の「専門性の深化（尖っていく）」です。AIを単なる効率化ツールとしてではなく、自らの専門性を研ぎ澄ますためのパートナーとしてどう活用するかを考えます。

第2部：非効率の価値 – 専門家の「手触り感」はどこから生まれるか

効率化を追求する中で、私たちは何か重要なものを失ってはいないでしょうか。

数千件の文献を読み込み、思考錯誤する。
一見、非効率に見えるそのプロセスの中にこそ、
専門家としての判断力や洞察力、
いわゆる「手触り感」を養う源泉があるのではないか。

「一件 非効率はここはめちゃめちゃ大事で…」

「泥をこねる」経験こそが、本物の「眼」を育てる

真の専門性は、クリーンな環境で効率的に生み出されるものではありません。それは、ノイズや無駄に見える情報を含んだ大量のデータと格闘し、「泥をこねる」ような経験を通じて培われます。

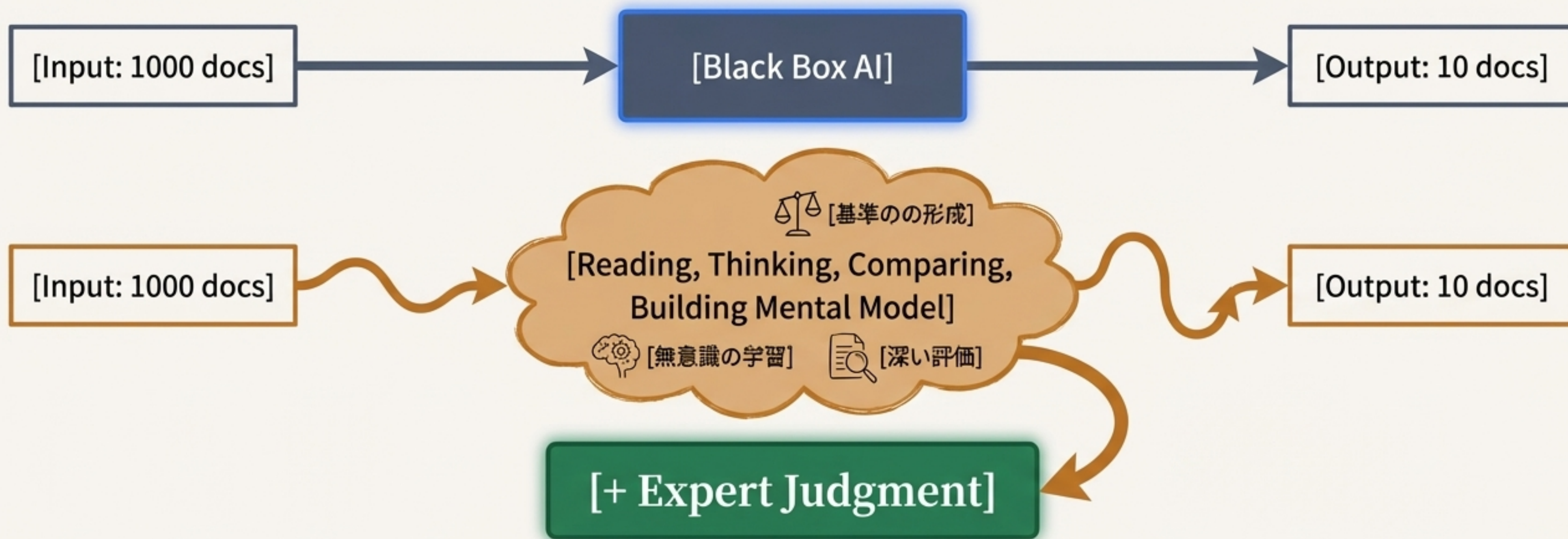
- **ノイズを知る**：「ゴミ」を知っているからこそ、「宝物」を見分けることができる。AIが提示する綺麗な答えだけを見ていては、その質を判断する「真美眼」は養われません。
- **思考のプロセス**：答えを出す過程での試行錯誤や失敗の経験が、応用力や未知の課題への対応力を生み出します。

「本当に非効率にこういろんなものをこうまなんか泥をこねるよう
にこうして泥団作ってこう磨いてったみたいな経験ってのはやっぱり
こが大事で」



実践例：スクリーニングにおける「非効率」の重要性

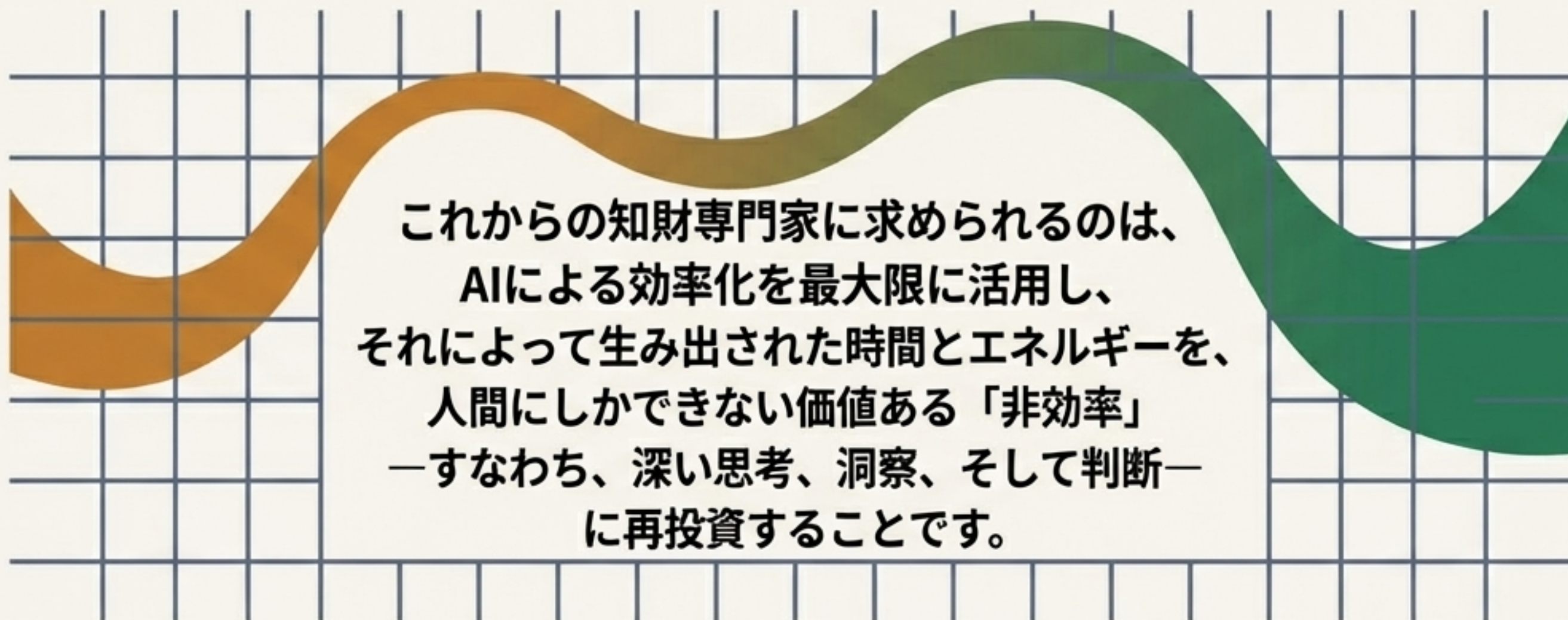
AIは1000件の文献から関連性の高い10件を瞬時に抽出します。しかし、人間が1000件に目を通すプロセスには、単なるフィルタリング以上の価値があります。



AIにスクリーニングを「丸投げ」することは、この最も重要な学習機会を放棄することを意味します。

第3部：あいだで磨く – AIを「思考のパートナー」とする新時代

効率か、非効率か。この二者択一ではありません。



AIは「答えを出す」ツールから、人間が「より良い問いを立て、
深く考える」ためのパートナーへと進化します。

人間の新たな役割①：問いを立てる者

AIは与えられた問いに答えることはできますが、真に解くべき課題、すなわち「正しい問い」を立てることはできません。

- **手段と目的の峻別:**「特許調査は手段に過ぎず、目的ではない」。クライアントが本当に解決したいビジネス上の課題は何かを特定し、それを解くための問いを設計することが、専門家の最も重要な価値となります。
- **課題の再定義:**顧客は「先行技術調査をしたい」と言いますが、真の目的は「この発明で事業を守りたい」かもしれません。その本質を見抜き、課題を再定義するのは人間の役割です。

「特許調査ってというのは手段に過ぎず 目的ではない
ですので やっぱ 人が考えてですね 調査によって何を
解決したいか」



人間の新たな役割②：真美眼を磨く者



AIはもっともらしいアウトプットを生成しますが、その質、妥当性、そして文脈における意味を最終的に判断するのは人間です。

- **品質の最終責任者**：AIの生成物はいくまで「素材」です。その中から本物を見抜き、偽物を見破る「真美眼」が求められます。
- **経験に裏打ちされた判断**：この「眼」は、これまでの「泥をこねる」経験、すなわち成功と失敗、ノイズとシグナルの両方に数多く触れてきた経験によってのみ磨かれます。
- **説明責任**：AIが出した結論を、なぜそれが正しい（あるいは間違っている）のか、自身の言葉で説明できる能力が不可欠です。

人間の新たな役割③：責任を負う者

AIは分析や生成を行います、その結果に対して責任を取ることはありません。専門家としての価値の根幹は、自らの判断に責任を負うことにあります。

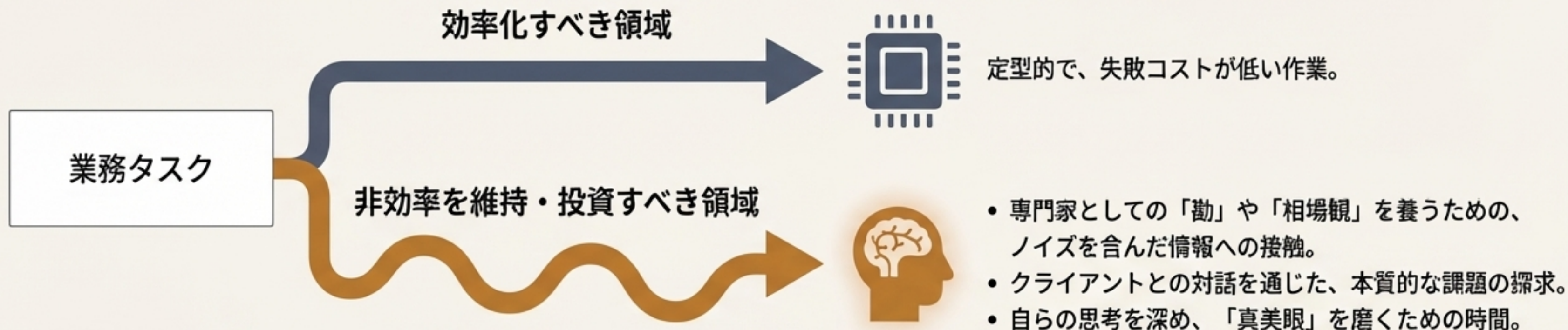
- **判断と覚悟:** AIが提示する複数の選択肢から、最善の一つを選び、その結果を引き受ける。この覚悟こそが、プロフェッショナルとツールを分ける一線です。
- **倫理的・法的視点:** 生成された内容がもたらす法的・倫理的な影響を評価し、クライアントに対して最終的な責任を持つのは人間です。

**AIは計算し、人間は決断する。
そして、その決断に責任を負う。**



結論：「意図的な非効率」を設計せよ

AI時代に他者と差別化し、専門家として進化し続けるためには、ワークフローの中に意図的に「非効率」なプロセスを組み込むという発想の転換が必要です。



非効率は排除すべき「無駄」ではなく、専門性を育むための「投資」です。

AIの時代において、
私たちの最大の価値は、
より速く答えを見つけることにはない。

それは、本当に価値のある問いと、
苦しみ、格闘する能力そのものにある。